

## 不登校からの自分づくり—面談で母親を支え続けた3年間

S君（高1男子）の母親が相談にみえたのは2013年6月頃。今年の6月で3年になる。不登校で閉じこもりだったS君が自分をどう立て直していったか、振り返ってみたい。

S君は中2の夏休みに部活の友人とのトラブルが原因で、中2の9月から中3の卒業時まで登校できなかった。ただ修学旅行には参加できたし、学校の学習室には時々通っていた。高校入試については、合格できそうな所を3校勧められ、結果、合格した高校は、前橋から片道1時間50分かかった。5日間通ったが、6日目の朝起きられずに欠席し、そのまま家に引きこもるようになった。親とも話さなくなり昼夜逆転の生活が続いた。

### いろいろな道がある

最初の面談の時母親から以上のような報告を聞き、「高卒の資格をとる方法はいろいろあるので焦らないこと、登校刺激はしないこと」などを話した。S君には会えなかったので、以後ずっと、母親と面談して助言をするという形になった。

夏休みに入りS君は少し気が楽になったせいも、多少外出できるようになり家族と食事もするようになった。しかし、8月末に学校から今後のことを決めたいと連絡が入ると、すっかり落ち込んでしまってまた部屋にこもるようになった。学校からの刺激を取り除けば気が楽になるだろうと考え、母親と相談して3月まで休学にして様子を見ることにした。

### 父親の変化とメッセージ

父親とは殆ど話をしなかったようなので、父親に「S君のことを大切に思っていること、今後のことはゆっくり考えよう」という主旨のことを話して貰うように母親に頼んだ。休学届を出してからは落ち着いたようだったが、3月までは家に閉じこもる生活が続いた。3月に学校

から連絡が入ったので、今後の事を考え始め母親に尋ねたりした。いろいろと彼なりに迷い、考えたようだったが、3月29日に突然、留年してやり直すと宣言した。

4月9日に登校し1歳年下の生徒に混じって1日過ごした。ところが、帰宅後春休み中に出された宿題を見て、「こんなに沢山の宿題を一度にやれないし、やっぱり無理だから方向転換を考える」と言い出した。そして本人が通信制のサポート校へ方向転換することに決め、気持ちも明るくなり、近くのコンビニでアルバイトを始めた。

9月3日に転入手続きが済み、スクーリングに出席し、学園祭に参加して順調に高校生活が始まった。しかし、週2回のバイトが深夜に及ぶこともあり、その結果昼夜逆転の生活になってしまい、11月からのレポートを提出出来ないまま学年末になった。

### 「お前の人生なのだから」—突き放す

3月の初めに両親と3人でよく話し合った。本人は「続ける自信がない」と言って不安そうだった。母親が「辞めたければ辞めてもいいんだよ。お前の人生なのだから」と話した。翌朝本人が「もう一度やり直したいから助けてほしい」と意志を伝えたので、再度挑戦することになった。コンビニのバイトも辞めて学校の事を優先することにした。今年度4月からは毎月のレポートも提出し、スクーリングも出席出来て進級が決まった。

母親とは毎月一回面談してその時々課題について助言した。特にS君が家にこもってしまった一番大変な時には、母親の心を支えることを第一に考えた。S君が立ち直れたのは両親が我慢強く見守ったことと、「お前の人生なのだから」と突き放して考えさせたことが大きかったと思う。

（文責 三輪弘子）